

学 心 相 想 術

R・エマーソン/R・フレッツ/L・ショウ著
方法としてのフィールドノート
ストーリー物語作成まで
現地取材から民族誌の作成までフィールドワークの全過程にわたりて「フィールドノートをいかに書くか」を徹底的に論じたフィールドワークの入門書である。それは、カリフォルニア大学の社会調査実習で練りあがられただけに、フィールドワークを実践する際にその各段階で必ずぶつかる具体的問題を丹念に説明する。たとえば、これまで研究者たる分析的記載に関する説点の多様性、筆記モードと読解モードの関連づけ、それに同時進行的に書き留めるメモの取り方などを、なるタイミング、話法と視点の明など、本邦初公開ともいえるもので、フィールドワークの実践的テキストの定番本ではないマニュアル集となる。また、人種、ジンダー、階級などを例にあげメンバーの固有な意味をとらえる方法や、フィールドノートから理論を構成す

るための2段階のコーディングやメモの使い方、そしてそこから分析的テーマを中心とする民族誌に仕上げるプロセスのくだりなどは、フィールドワークを専

門として記述し記録されることを強調する。本書は、フィールド、そのメンバーの視点、そしてフィールドノートの重要性を繰り返す。

このようにフィールドノートを重視するのは、現場での経験と観察を最初に文字テクスト化する際の相互反映性（reflexivity）をはつきりと自覚するからに他ならない。

さて、本書を読んで、「フィールド屋です」と自己紹介をしていた自分が本当に情けなくなった。私の仕事がフィールドでの第一印象や勤による大雑把な仕事でしかなかったことが身に沁みてわかったからだ。しかし、残念ながら、これは私だけの欠点ではない。有賀喜左衛門などの優れたフィールドワークの伝統がすれ、久しく質的研究に成果

実践的テキストの定番本 フィールドノーツをいかに書くか

蘭 信 三

実践的テキストの定番本

フィールドノーツをいかに書くか

蘭 信 三

攻する大学院生はもちろんのこと、研究者にも、きわめて有益な参考書となつてゐる。本書は、少々大部で

冗長感は否めないが、学習できるフィールドワークの実践的テキストの定番本といえよう。

本書の特徴は、フィール

ドワークを象徴的相互作用

論とエヌメンドロジーと

いうふたつの学問的伝統にひきつけて捉えていること

だ。すなわち、社会生活と

は社会的相互作用のなかで

共有される欠点でもある。

戦後の社会学は、「科学的

いく創発的な意味の体系だ

から、フィールドワーカー

も、そのメンバーとしてフ

ィールドの社会的相互作用

だと定義する。フィールド

ノームも、メンバーが他者

とのやりとりを通して、ど

うふたつの社会的相互作用

が生成され確定されてい

く、プロセスを観察する方法

だ。したがって、ここに

に参加し、そこで意味の体

系が生成され確定されてい

るための2段階のコーディ

ングやメモの使い方、そし

てそこから分析的テーマを

中心とする民族誌に仕上げ

るプロセスのくだりなど

は、フィールドワークを専

門として記述し記録されるこ

とを強調する。本書は、フ

ィールド、そのメンバーの

視点、そしてフィールドノ

ートの重要性を繰り返す。

このようにフィールドノ

ートを重視するのは、現場で

の経験と観察を最初に文字

テクスト化する際の相互反

映性（reflexivity）をは

っきりと自覚するからに他

ならない。

さて、本書を読んで、「フ

ィールド屋です」と自己紹

介をしていた自分が本当に

情けなくなった。私の仕事

がフィールドでの第一印象

や勤による大雑把な仕事で

しかもかかったことが身に沁

みてわかったからだ。しか

し、残念ながら、これは私

だけの欠点ではない。有賀

喜左衛門などの優れたフィ

ールドワークの伝統がす

れ、久しく質的研究に成果

がない。しかし、質的研究に成

果を出さなければならぬ

のである。したがって、

本書は、少々大部で

冗長感は否めないが、学

習できるフィールドワーク

の実践的テキストの定番本

といえよう。

本書は、少々大部で

冗長感は否めないが、学

習できるフィールドワーク

の実践的テキストの定番本